

小学校の裏にはハス畑が広がっていた。沿うように長い池があり、竹の延べ竿で初めてフナを釣った。成長するにつれ、カサゴやベラ、季節に合わせキスやカレイ、アジやハゼ釣りもした。20から30歳にかけては、船で沖磯に渡り、グレ(メジナ)やイシダイの大物釣りに熱中し、厳しい自然にもみくちゃにされたりもした。釣りのことを思い返すと枚挙にいとまがないが、少しだけ。

昔のチヌ(クロダイ)の夜釣りは強い印象を残す。タイコリールを付けたガラス竿にテグスを通し、その先に釣り針1本という極めて単純な仕掛け。大虫をタラりと1匹刺し、そっと闇に投げ入れる。地上の幽かな音も気配もベタ凧の海に沈んでゆく。夜光虫の青白

い光がテグスを伝って虚無を引きずる。次の瞬間、グンツと餌にもたれる魚。手に伝わる銀鱗の震え。針掛かりする前の緊迫に、魚も人も覚醒する。絵を描いていこうと決めたころのこと。これでもう僕は「漁師にはなれない」と思った。なりたいたいということではなく、まっとうな

釣り

仕事の象徴としてだ。テレビの画面ですら、漁に出て行くシーンなどを目にするたびに、あっけなく涙腺が緩んでいた。漠としたものに向かう若い覚悟の興奮と、社会における然るべきものとの別れ。

40代になると、数年間だがアマゴ狙いの溪流釣りをした。道なき道を分け入り、川を遡上しながらの釣り。谷に抱かれ、自然を手掴みに奥へ奥へと深まってゆく。同じころ、釣りに関する随筆や小説を手に入る限り片っ端から読んだ。著作は川釣りが圧倒的に多く、海釣りにはごくわずかしかない。流れ続ける川は言葉を手繰り寄せ、漠とした海は書き手を突き放すのか。その後しばらく釣りから離れたが、50歳を過ぎたころ再び始めた。車で行ける波止や岸からの穏やかな釣り。天地万象を虚心に受け入れ、海景の中のポツンとした点となって竿を出す。



傍らではアオサギが微動だにせず同じウキを見る。美術評論家のO氏が、僕の展覧会図録に寄稿した批評の中で釣りに触れている。「海や風や対岸の島や空を呼吸する時間。吉田は釣りよりも、この釣りの時間がきつと好きなのだ」と。そうかもしれない。でも僕はウキから目を離さない。風景なんてほとんど見えない。だが言われるように、ウキを通して融通無碍にその時間を丸ごと呑み込んではいけるだろう。それはまた、描く絵に影響を及ぼしているに違いない。

ここ数年釣りをしていない。自分を画室に留め置くのは、残る歳月を惜しみ始めたからか。釣りはもう、近くも遠くも思い出さずてゆく。

(吉田 淳治・画家)